

鄂上語子全集

第四卷

鄂上語生子全集

第四卷

岩波書店

野上彌生子全集 第四卷

第八回配本(全二十三卷)

一九八一年一月七日 発行

定価 三〇〇〇円

著者 野上彌生子

発行者 緑川亭

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番
発行所 雑誌岩波書店

電話 〇三上六五二四二一
振替 東京六上六二四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

母親の通信	三
生別	五
怖しい啓示	九
或る少女の不思議な死	一三
所有	一七
或る男の旅	一九
或る女の話	二四
海神丸	三一
後記	三七

小
說
四

母親の通信

お母様——

この間、お兄様からのお手紙に、お母様が子供達のことを云ひ暮らしてゐらつしやる、赤さんがさぞ大きくなつただらうと懐かしがつてゐらつしやる、と書いてあつたのを見ました時、私は一度ゆつくり、小さい三人の此頃の生活を出来るだけ委しく書いてお目にかけてやうと思ひ立ちました。ところで、私はずつと以前からこの新聞へ何か書いて送るといふ約束がしてありましたので、斯う云ふ事を思ひつきました。その通信をこの新聞——九州の多くの家庭に購読されてゐる新聞——の紙上に載せるならば、お母様の毎日のおたのしみになるばかりでなく、同時に私の長い気懸りな文債をも果たすことが出来るわけだと。

これから彼等は毎日お母様の前に現はれることでせう。彼等の血色のよい、円い頬を御覧下さい。此冬は殊に健康がよろしいのです。あのふざけ方を御覧下さい。それから又あのおしやべりを。泣いたり、笑つたり、転がつたり、取つ組み合をしたり、どんな大騒を始めるか知れません。けれども私

は信じます。彼等を愛するものに取つては、彼等の泣くことは彼等の笑ふ事に劣らないほど可愛い見物ものであり、彼等の涙は彼等の微笑と同様にいたいけな魅力である事を。ですから私は、おとなになさいますとか、騒がないでゐらつしやい、とか云ふ訓戒や注意なしに自然の儘、飛んだり、はねたりしてゐる儘の彼等をお送りしようと思ひます。けれども、彼等が今日までにいつとなしに両親から与へられた習慣、性癖、趣味——お母様、早いものではございませんか。友一はもう十になります。邦夫はもう七つです。生れて九箇月にしかならない赤さんだけは、この心配からは遠いのですが——お母様が子供たちにありますと望んでゐらつしやるそれと、全然一致してゐるか、どうか、ただそれだけを怖れてをります。それ以外は、私はまあ大体から云つて安心してをります。彼等は、上の二人とも、正直で、善良で、健康でございますから。顔だつてさう醜みにくくはございませんわ。

ねえ、お母様、私の子供たちはみんなよい子供ではございませんか。あの可愛らしさを見てやつて下さい！

と叫び度いのでございます。殊に赤さんの顔を見てゐると、斯う云ふ感情が劇はげしく起ります。

この赤さんを見て下さい。此の美しい、可愛い顔を褒めて下さい！

母親のこの強請きやうせいは誰にも拒まるべきものではないやうな気がいたします。私が赤さんを抱いてゐる時、その小さい人のことを挨拶に入れることなしに私に話し掛ける人があれば、その人は少くともその一瞬間はきつと私の信用を失ひます。

「この人は本統に愛すると云ふことを知らない人だ。」と。

全く子供を愛さないでものを愛すると云ふ事は決して出来ません。同時にまた愛すると云ふ事は真にどう云ふものかを教へる最もよい教師は、子供以外には存在しないもののやうに思はれます。お母様、それ故、この子供たちがあなたのお膝下に走ると共に一般公衆の前に現はれる事は、決して無意味ではなからうと信じます。人々は彼等の感じる事、見る事、話す事、その他すべての生活のうち、人間が神様から貰つたには相違ないが、この地上の長い旅行の間に見失つたり、落したりした多くのよい物を、再び見出す悦を有^もち得るだらう、と思ふからでございます。

今丁度お乳の時間になつて、赤さんは彼の善い^のう^やの抱擁の中に、小躍しながら私に近づいて参りました。お乳がすみましたらば、先づこの一番小さい人のことから書き始めませう。――

赤さんのことを話すためには、赤さんの善い^のう^やの事から話さなければなりません。

御存じの通り、上の子供は二人とも子守の手にかけた事はありませんでした。けれども小さいものが三人となつては、一人きりの女中ではとても手が廻りきれないので、今一人の使用人がどうしても必要となつて来ました。それは主に赤さんに関してふえた仕事を充たす為に外ならなかつたので、私はただ漫然と子守娘でも傭へばよいと云ふ氣になりました。出入の者の世話で十四になる小さい娘が傭はれて来ました。これまで一二軒子守奉公に上つてゐたこともあるとかで、幾らか小柄なだけで、

さう醜くもない娘でありました。

「よい塩梅であつた。これで私も幾らか手がすける。」

私はその娘の、洗ひざらしの浴衣を着た瘦せた脊中に、赤さんを負んぶさしてやりながら、久しく思ふばかりで手をつける余裕のなかつた仕事の方へ思を走せました。でも私の満足はその瞬間だけでした。半日もたゝないうちに、私は自分の計画の非常に粗漏であつたのを後悔しなければならなくなりました。

丁度暑中休暇で毎日うちにゐた兄のために、朝から活気づいて、面白く遊んでゐた兄弟の遊が、この新来の見物人のために、——彼女は、機会のある毎にその地位を転じようとしてきました。見物人から遊び手の方へ。後ではずつと大胆になつて、その支配者の地位にさへ、——意外な妙なものになつて行くのを私は見逃すことが出来ませんでした。彼女は兄弟に取つて訳の分からない振舞をしたり、禁ぜられてゐる下等な言葉を使つたり、正しくない狡い遊び方をしたりしました。兄の顔には軽蔑と不満の色が著しく浮びました。

明けの日になると彼は自分の本棚の書物や、またおもちゃ棚のおもちゃやを、彼女が勝手にいぢり廻すことに就いて訴へて来ました。彼は弟と共同で三疊の間を有つてゐます。其処には、美しい絵の入つた書物や、珍らしい玩弄具や、或は取つて置の菓子包など、すべて小さい子守娘のあらゆる誘惑物が充ちてゐました。饒かでない家に生れて、さう云ふものに対する欲望を封じられて来た彼女の

目に、余りに怖ろしいものを見せ過ぎたと云ふ者が、強く私を打ちました。同時に、私は、許可なしにその部屋へ立入るなとか、また彼等の玩具具に手を触れてはならぬとか、厳しい禁令を彼女に課するには到底忍びませんでした。それは、ほんの三つ四つしか年の違はない子供と子供の間、主人と奴隸の道徳を制定する事でありましたから。と云つて彼女を二人の兄弟と安心して遊ばせられるやうな友達に作りあげるには、私はたしかに自分の娘一人を育てる程の愛と努力を費さなければならなかつたであります。それも成功しなかつたかも知れません。新たに作るのではなくて、作り直すのですから。

斯う云ふ意外な故障は暫く措くとしても、彼女の脊幅にしては割合に大きな赤さんが、窮屈らしく縛りつけられてゐるのを見るのは、私にはとても堪へられさうになくなりました。彼女は此の貴重な荷物をしよつた儘、何処へ飛び出さか知れたものではありません。何処かの涼しい木蔭で愉快な鬼ごつこの一つもするためには、脊負つてるものをばそこいらの道ばたへ投げ出さないと限らないでせう。

私は急に怖ろしくなつて来ました。

明けの日、お目見えの結果を氣遣つて来た世話人に向つて、私はただ、赤さんの割にしては彼女が余り小さ過ぎるから、と云ふのを理由として、一緒に連れて帰つて貰ふ事にしました。この事を云ひ

聞かされた彼女が、明かに失望の色を見せると共に、拒絶された者の不面目を感じるもののやうに急に小さくなつてゐるのを見ると、私は何だか非常に残酷なことをしたやうな気がして、せめて最後に出来るだけのことをして、彼女を悦ばしてやり度いと思ひました。小さい兄弟は私の勧めに従つて、彼女の目を引きさうな美しい絵の附いた雑誌を二冊づゝ彼女に贈りました。私は少しばかりの金と、一と包の菓子をそれに添へました。それを包まうとして彼女の拵げた風呂敷の中には、寝捲や手拭や小さい櫛などと一緒に、赤や青の折紙が少しと、をかした安物の人形が鄭寧にしまつてありました。

「おもちゃを持つて歩く小さい奉公人」

と云ふ考が、私の痛々しい同情を呼び起しました。どんな理由からであるにもせよ、彼女がその儘落ち着くことが出来ないで、また知らない家の、知らない主人の手に送り出されることの不幸は、私の負ふべき責任であるやうな気がしました。

私は彼女を台所口で見送つた後、私の感情をのぶに洩らししました。而してものをよく考慮してかゝらなかつた後悔と失望を話して、今度は傭ふならば一人前の女中でなければならぬと云ひました。それを聞くとのぶは彼女の希望を述べました。自分が赤さん附になり度いと云ふのでした。

「さうして呉れゝば何よりだけれども。だつて大丈夫かい。中途からお守さんはいやになりましたなんて辞職されては困るよ。」

「そんなことは決してございません。私は御飯焚よりも、赤さんのお守が致し度いのでございます

から。」

斯うして、下働の女中がやがて見つかると同時に、のぶはずつかり赤さんの世話を自分の手一つに引き受けたのでした。この新しい契約が私をどんなに安心させ、またどんなに悦ばしたかは、とても想像がおつきにならないと思はれます。それ程、私はこの三四年の間に見た彼女の善良と、生れながらの純真な心につつかり傾倒してゐるのでございます。私は彼女が四年前に初めて私たちの家に来て以来、今日まで彼女の怒つた顔を一度だつて見たことがありません。またその言葉、その行動に、一点の不正直をも、虚偽をも認めることが出来ませんでした。如何なる瞬間にも、彼女は常に善良で、快活で、柔順そのものの如くでありました。彼女はもう二十三であります、それでも小柄で、越後女の色白な、円い顔をした面影は、誰にも彼女の本統の年を云ひ当てさせる事が出来ない程若く、無邪気に見えます。強ひて難を求めるならば、華奢など云ふ文字が使はれ得る位の優しい彼女の身体つきが、どんな多くの雑用にも堪へられる頑強と云ふ下女の必要条件を欠いてゐること、同じ原因から怖ろしく寝坊だと云ふ事だけでありませう。併し私は年に一度や二度病気で寝る位の事や、朝二三十分おそく目覚める位の事は、彼女の優れた性質のためには悦んで我慢します。全く贖トクのやうな丈夫な下女と云ふものは、幾らかきつと不快な、尖とげ々しい粗野と横着を有つてゐるやうに思はれます。のぶはさういふ連中に比較すれば、殆どレディと云つてもよい程、しとやかで、鷹揚です。それがまた彼女には少しの気取りでも、不自然でもない事は、彼女の明けつ放しな、子供々々した笑ひ声を聞け

ばすぐと分かります。

彼女は全くよく笑ひます。さうしてその笑の仲間はきつと子供たちであり、その笑の対象物は、子供たちのちよつとした可愛い振舞とか、滑稽な話とか、でなければ、それに関聯するものであります。彼女の中にはまだ七つか八つの子供がゐるやうです。さうしてその笑は、お追従でもなければ、作り笑でもなく、彼女の中の子供が、子供同士の共鳴、同じ興味、同じ感激で、その儘飛び出して、大声をあげて笑ふかのやうでありました。斯うして彼女と子供たちのゐるところには、必ずこの太陽気な哄笑で、愉快な楽しい雰囲氣が作り出されるのであります。勿論彼女は彼等の大好きなのうやであります。而して彼等の面白い遊や、またおどけた身振や、その他ポンチ人形の三角帽子が落つこちたとか、綿細工の犬と猫が角力を取つて、犬が負けたとか云ふやうな事が、彼女のから／＼した笑ひ声の承認に依つて、いよ／＼、素晴らしく面白い、滑稽な大事件となつて行くのであります。

彼女の渾名を一つ洩らしませう。それは兄弟の子供に依つてつけられたもので海月と云ふのです。彼女の前髪には後れ毛があつて、子供達と大騒をして遊んだ後などには、その後れ毛が海月の足みに似て彼女の白い、円い額に垂れ下る事から生じた渾名でありました。彼女に對する私の偏愛は、或る時、彼女を非常に美しい娘であるかのやうにさへ感じさせます。殊にその前髪の褐色の柔かい後れ毛に取り捲かれた、子供たちの所謂「海月ののうや」の顔には、ヴァン・ダイクの筆に残つてゐるチャールズ一世の皇后の額を聯想させる或る物があります。

斯う話して来ますと彼女がどんなに善良でまたどんなに快活で、且つ相当に美しい娘であるかおわかりだらうと思ひます。けれども彼女の身の上は大変不幸なのです。両親もなければ、兄弟や親類と云ふやうなものも殆どないのです。越後の田舎町の或る小さい孤児院で育つたと云ふだけで、もうどんなに不仕合なものが、想像されることゝ信じます。いゝえ、その話を委しくお話ししたならば——いつかまたその機会がきつとあると信じます——それが想像以上のものであつたのにびつくりなさるでせう。私は思ひます。それほど気の毒な境遇に成長した人であるならば、たとひその人がどんなに陰鬱で、どんなにひがんでゐるにもせよ、またどんなに歪んだ人生の見方をしてゐるにもせよ、その不幸を思ひやる事に依つて容易に許されなければならぬ、と。ところで、彼女の場合はすつかり反対であります。彼女はその不幸の迹を顔にも心にも微塵も留めてゐません。生れながらに恵まれた、彼女の透明な美しい心の上には、人為的の不幸や災難の如きものは、軽い塵埃かなぞのやうに、その原質を損じる力なしに、ただ表面に触れたと云ふだけで、その儘滑り落ちて行つたもののやうな気がします。どうか、これから先の彼女に、その不幸を償ふ程の仕合せがありますやうに！

赤さんはもう確かに彼女に強い偏愛を示します。どんな場合にでも彼女の姿を認めるや否や、まだ言葉の形を取り得ないをかしな叫び声で呼びかけ、躍り上り、全身をさし出します。彼女の手と御飯焚のつねやの手とは、直に選択されます。

「さあ、赤さん、電車、ごう、へ乗りませう。」

斯う云つて二人が後向いて並べた脊中にも、赤さんは鋭敏に自分のおんぶする脊中を見出します。

「おい、お伶俐な赤さん。」

彼女は小さい彼を載せながら、一としきりそこらぢうを飛び歩きます。彼女はどんなに嬉しいか分らないのです。斯うしてこの小さい主人を愛する事、また彼から愛せられる事は、自分の特権のやうに思つてゐます。それと共に彼女は彼女の女らしい趣味から、赤さんの身のまはりについていろ／＼な注文やら不平やらを持ち出して参ります。——もつときれいな帽子を冠せ度いとか、油屋さんがもう二三枚は欲しいとか、こんな着物はあんまりだとか。——

「赤さんは何んでもお兄さま方のお古ばかりでお可哀想でございますね。」

これは彼女が事毎に繰り返す嘆声であります。ですから赤さんは彼女の丹精でいつもおしやれがさしてあります。

さうですね。此処に彼の小さい肖像をスケッチして見ませう。

赤さんは、この頃はメリンス友仙のお胴着を重ねた派手な銘仙を着てゐます。——これも矢張りお兄さまのおさがりです。——おちやん／＼は大島緋です。——断つておきますが、これはおさがりではありません。T家の叔母さまからの贈物です。——其上にタオル地の、緑と赤で格子縞になつた四角な涎掛をかけてゐます。帽子は毛糸で編んだ赤い三角帽子です。——これが彼の不断着の中で一番よく似合ふ服装です。その帽子の下に在る健康な、いつもよく笑つてゐる、而して幾らかおでこの、

目のくるくるした円い顔を想像して下さい。またその左右の袖から現はれてゐる、ぼちやぼちやした手頸と、直径一寸二三分のうす桃色の掌を想像して下さい。それからまたその両手の指の先についてゐる十の小さい爪をも。この手は、もう可なりいたづらです。障子を破く事も知つてをれば、兄さんたちの大事なおもちゃをかき廻すことをも知つてをります。

「ほら、赤さんが来たよ。」

と叫ぶ声は、そこいらに大事な玩弄具おもちゃを拵もげて遊んでゐる二人の兄に取つては、暴徒の襲来を意味するに外ならないものなのです。あらゆる警戒と防備で、この小つぼけな、併し怖ろしい一つの武器——それは彼に泣かれる事でありませう。あの全力的な悲しみの叫び声には、流石の兄さんたちも急に降参してしまひませう。あんな小さなものが、あんな大きな声を出して、あんな涙を流して泣くと云ふことは彼等の正直な優しい心の到底見てゐられないものです。——を有もつた敵を撃退しようとしたしませう。結局のうやの仲裁と嘆願で、赤さんの借り出すものは、その中での一番冷遇されてゐる、一番貧弱な、こはれかけの馬か何かの一つに極まつてゐませう。

こんな場合は別として、二人の兄弟たちはもう十分この小さいものを愛する事を知つてをり、またそれを悦ばす方法に慣れてをります。

「赤さん、赤さん、赤さん。」

彼等は彼等の有つてゐる一番優しい声で呼びかけ、一番親しい笑顔で笑ひかけませう。彼の賞讃を得